舌切りスズメ　～悲劇の幕開け～

赤面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
舌切りスズメ　～悲劇の幕開け～

【Ｎコード】
Ｎ０１００Ｄ

【作者名】
赤面

【あらすじ】
おじいさんに助けられたスズメ、そのスズメに嫉妬をたぎらせるおばあさん。誰もが知るあの『舌切り雀』が昼ドラ風にアレンジされた、悲劇の物語。

（前書き）

とある話からはじまったネタ小説。
書くうちにのめりこんでしまいました。。。

よかったらコメントに感想ください。

内容がかなりドロドロしております。
心臓の悪い方
妊娠中の方
お年寄りの方は
十分ご注意して、読みたい方だけお読みください。

舌切りスズメ

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがおりました。
おじいさんとおばあさんは子供には恵まれなかったものの
とても仲がよく幸せにくらしていました。
ある日おじいさんがいつものように山へでかけると
娘が一人倒れていました。
おじいさんはあわてて娘に駆け寄りました。
近くで見ると、娘は小奇麗な着物を着ており
髪は長く色白で美しい容姿をしていました。
細い足からは何かで切ったのか血が出ています。
おじいさんは布で傷を縛ると娘を家につれて帰りました。
おじいさんがおばあさんにこの娘をそばらく家においてやれないかと
相談しすると最初のうちはしぶっていましたが、
このまま放り出すわけにもいかず、
そのうえおじいさんの頼みとあっては無下にすることもできず、
娘をしばらく家においておくことになりました。
娘は名をスズメといいました。
スズメはしばらくは怪我のこともあってじっとしていましたが、
怪我がよくなるとよく家の手伝いをするようになりました。
おじいさんはスズメのことをたいへん気に入っていましが。
おばあさんはおじいさんとの時間をスズメに奪われたような気分で、
あまりいい気分ではありませんでした。
そしてある日、寝る前におばあさんがスズメに、傷もいえたのだから
家に帰るように説得にいこうとスズメの部屋に行くと、
スズメの部屋には誰もいませんでした。
おばあさんはいやな予感がして慌ててておじいさんの部屋に行きまし

た。
戸を少しだけ開けて中をのぞくと、
そこにはなんと、同じ布団で寄り添いあうおじいさんとスズメの姿が・・・
それを見た瞬間おばあさんは目の前が真っ白になりました。
こみあげる怒りを押さえつけ、
おばあさんはそっと戸を閉めて自分の部屋へと戻っていきました。
そして次の日
事件はおこりました。
おじいさんがいつものように山へ出かけると、
おばあさんは行動にでました。
台所で包丁を握りしめるとスズメのもとへ向かいました・・
そのころおじいさんはおばあさんの様子に疑問を持ちながら山仕事をしていました。
最近のおばあさんはスズメと自分が一緒にいるのが気に食わないのか、
どことなく不機嫌な様子でした。
ところが今日の山へ送り出す時のおばあさんの顔が
妙に優しげな顔だったのでした。
なぜかなぜかと悩むうちにおじいさんは心配になって家に戻ることにしました。
そして家ではおばあさんが包丁を片手にスズメの部屋の前まで来ていました。
ガッと戸を勢いよく開けると何事かと驚くスズメの姿がありました。
しかし少したつとスズメの顔が青ざめていくのがわかりました。
それもそのはず
スズメの目には包丁を片手に鬼のような顔をしたおばあさんが
写っていたのですから・・・・
スズメがうしろへ半歩さがると、おばあさんがスズメに迫り
スズメの胸倉を包丁を持った手で着物が裂けんばかりにつかみ上げ

ました。
この泥棒スズメめ！お前のふしだらな舌をこうしてやる！！！っと
奇声を上げると開いた手でスズメの舌をつかみだし、
包丁を高く振り上げ、包丁を握るてにグッと力を入れると一気に振
り下ろしました。
あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁ・・・・・
スズメの叫び声があがり、同時に戸口をつかむガッという音が聞こ
えました。
おばあさんが振り向くとそこには
真っ青な顔をしたおじいさんが肩で息をしていました。
血で染まった包丁とそれを握るおばあさん
口を押さえそれでも抑えきれずに血を滴らせうずくまるスズメ
そんな悲劇的な状況のなかしばしの沈黙が流れた。
そしてそんな沈黙を最初に崩したのはおばあさんだった。
見てしまったのね・・・・ぼそっとそうおばあさんがつぶやくと、
カッと顔を上げ、あなただけには見られたくなかったのに！っと叫
ぶと、
包丁を投げ捨てスズメの腕をつかむとおじいさんのいる戸に向かい
足早に歩き出しました。
おばあさんのあまりの形相におじいさんが一歩下がろうとすると、
おばあさんがおじいさんの手をつかみ部屋の中へ引き込みました。
そしておばあさんは自分とスズメが部屋から出ると戸をいきよいよ
く閉めました。
ハッとなっておじいさんが慌てて戸を開こうとすると
何かで固定されているのか戸が開きませんでした。
おじいさんは戸を叩き、あけろ！ここをあけなさい！！！っと叫び
ました。
おばあさんはおじいさんの叫びを無視してスズメを外まで引っ張っ
ていくと
乱暴にスズメを外へほうりだしました。

スズメは口を押さえたまま力なく地面にへたり込みました。
そんなスズメにおばあさんは容赦なく怒声を浴びせました。
さぁでておいき！！二度とここへは戻ってくるんじゃないよ！！
そう叫んでおばあさんはスズメを威嚇するように包丁を高々と振り上げました。
スズメは涙を流しながらヨタヨタと山に向かって歩き出し、
山の中へとその姿を消していきました・・・・・

スズメが走り去っていったその晩。
おじいさんは、おばあさんと食事をとっていました。
おばあさんは、スズメがやってくる前の優しくやわらかい表情でした。
しかし、おじいさんは一度おばあさんの裏の一面を見てしまったせいか、
正直落ち着いて食事など取れる心境ではありませんでした。
そんな心境とスズメのことを心配に思う心が折り重なって、
おじいさんは、その夜家を抜け出して、スズメを探しに行く決心をしました。
おばあさんが眠ったであろうころあいを見計らって、
おじいさんはこそこそと玄関口に向かいました。
ギシッ・・・
古く年季が入った家は床板に足を乗せるたびに軋み、
小さな音を響かせました。
足元から軋む音がするたびに、おじいさんは寿命が縮む思いでした。
なんとかおばあさんに気づかれることもなく家を抜け出すと、
スズメを探しに、あても無く山へと入って行きました。
最初の方は家がまだ近いこともあって、小さな声でスズメを呼びながら歩いていましが、
小さかった声も今ではかなりの大声にまでなっていました。
しかし年には勝てず、声は枯れ足取りは重く、だんだんと疲労して

いった。
疲労は視界にまで影響をおよぼした。
だんだんと焦点が合わなくなり、視界がゆらぎはじめる。
もうだめだ・・・
そんな思いがよぎった時、ゆらぐ視界の先に建物のような物が映った。
それを見た瞬間、おじいさんは途切れそうになる意識を首を横に振り呼び戻した。
視線の先には旅館のような立派な門構えをした、広いお屋敷がそびえていた。
おじいさんは屋敷に駆け寄ると、残りの体力をふりしぼって声を張り上げた。
スズメ！！
山の静寂の中におじいさんの声が響いた。
しばらくするとギィ・・・っと、門が人一人通れる分くらい開いた。
そこから外をうかがうように出てきたのは、まぎれも無いスズメだった。
おじいさんと視線が合うと、信じられないといった様子で口元を抑えた。
そして門から飛び出すと、涙を流しながらおじいさんに駆け寄った。
おじいさんはスズメを優しく抱きとめた。
スズメは舌を切られたせいか声が出せなくなっている様子だったが、
それでもおじいさんに会えた喜びが顔全体に表れていた。
スズメはおじいさんの腕をひいて屋敷に招きいれようとするが、
おじいさんは屋敷に入るべきか悩んだ。
しかしうれしそうなスズメの顔を見ると拒むこともできず、
スズメの誘いを受けることにした。
その選択が悲劇の引き金になるとも知らずに・・・
おじいさんはスズメの屋敷で楽しいひとときをすごし、その晩は屋

敷に泊まった。
翌朝、おじいさんはおばあさんが心配しているといけないからと、
家に帰ることにした。
スズメは寂しそうな表情を一瞬だけ浮かべたが、おじいさんにわが
ままを言うまいと、
笑顔でおじいさんを送り出した。
そしておじいさんが家を出る時に、お土産に大きい箱と小さい箱の
好きな方を持ち帰るようにと、
家の者に勧められ、最初は遠慮していたおじいさんも、
これ以上遠慮しては失礼と、小さい箱を持って帰りました。
そして家におばあさんが慌てて出てきました。
よほどおじいさんのことを心配していたらしく、何があったのかを
聞いてきました。
前回のことからスズメに会いに行ったなどとは言えず、古い知り合
いの家に行って、
お土産に小さな箱をもらって来た、と言いました。
おばあさんはその話を聞くと、そうでしたかそうでしたかと安心し
た様子でした。
そしてさっそく箱を開けてみる事にしました。
箱を開けると中からは、綺麗な置物や布などが入っていました。
おじいさんとおばあさんはおおいに喜んでいました。
しかしおばあさんは箱の中の一枚の布に目がいきました。
はてどこかで見覚えが、何処で見たかと頭をひねりました。
そして思い出しました・・・
その布は・・・
以前・・・・
スズメがきていた着物に使われていた布でした・・・
珍しい柄の着物だったので、おばあさんはその柄をしっかりと覚え
ていました。
おばあさんはその布を引き千切らんばかりにギュッと握ると、そっ

と懐へとしまいました。
そして次の日、おばあさんは知り合いの家をたずねるからと、家を出て行きました。
おじいさんは普段、家事をおばあさんに任せきりだったので、たまには代わりにと思い、家の掃除をはじめました。
廊下を磨き、玄関掃き、部屋を片付けました。
あらかた掃除が終わったころには、もう外は暗くなり始めていました。
最後に残ったのはおばあさんの部屋でした。
かってに入るのはまずいかと迷いましたが、普段掃除をしてもらっているので、たまには自分がと掃除をはじめました。
おばあさんの部屋はこぎれいに片付けられていました。
ほとんど掃除するところはないかなぁと、部屋を見回しました。
すると机の上に一枚の布が置かれていました。
おじいさんは見覚えがある布を確かめようと手を伸ばし、その手を途中で止めた。
布は、二つに引き裂かれていた、まるで何かの代わりにされたように・・・
おじいさんは最初はまさかと思いました。
しかし布を見つめていると不安は大きくなり確信に変わりました。
おじいさんは家を飛び出し、山へとかけていきました。

そのころおばあさんは、布からおじいさんはスズメと会っていたと、確信を得て、スズメの屋敷を探して山をさまよっていました。
そして木々の間に立派な門構えをした屋敷を見つけました。

おじいさんは木々の間を縫うように走り抜けていました。
年老いた体は長時間の運動には耐え切れず、ヒューヒューとの呼吸の乱れる音が響いていました。

それでもおじいさんは、確信に近い予感に突き動かされて走りつづけました。

コンコン、門をたたく音にスズメは、おじいさんがまたきてくれたのだと思い、
顔をほころばせて門の前まで来ると、ゆっくりと門を開けました。

コンコン、おばあさんが門をたたくと、しばらくしてゆっくりと門が開きました。
そして、門の向こうに標的の姿を見つけると、おばあさんは目を輝かせました。
おじいさんは私のもの、誰にも渡さない・・・

門が開いた向こうには、スズメの予想していた幸福はなく、
あったのはまさに不幸の象徴のようなものだった。
病的なまでの笑顔を浮かべたおばあさんの姿、
悲鳴を上げそうになるが、舌の切られたスズメの喉は悲鳴を音にすることはできなかった。
悲鳴を上げることができない代わりに、恐怖の感情は涙となって流れ落ちた。
スズメはつまづきながら転がるように屋敷に逃げ込んだ。

おばあさんの気分は最高潮に達していた。
今まで散々自分のおじいさんはたぶらかし、自分をあざ笑っていた小娘が、
まるで足を撃たれた野ウサギが猟師から逃げるように、
地をはいずりながら不様な姿をさらしている。
恐怖で足に力が入らないのか、簡単に捕らえることができた。
そいて捕らえた獲物の細い首に、ゆっくりと自分の両手を押し当てた。

しかし、ふと視線を前にうつすと、大きな箱が置かれていた。
おじいさんの話を思い出し、いつでも狩れる獲物より箱の方が興味を引かれた。
そしておばあさんは箱の蓋に手をかけた。

おじいさんはようやく屋敷にたどり着いた。
門は開け放されて、屋敷からはドタドタと物音がした。
おじいさんは酸素を求めてあえぐ体に、グッと力をいれて屋敷の中へと駆け込んだ。
最初に目に飛び込んだのは、床に仰向けに倒れてぐったりしているスズメの姿、
しかし指がかすかに動いているのを見て、まだ命があることを確認する。
そして次に、こちらに背を向けて、何かに手を伸ばすおばあさんの姿が見えた。
おじいさんはおばあさんの肩に手をかけて、
もうやめてくれ！っと叫んだ。
そしておばあさんはおじいさんの方に顔を向けながら、
箱を、
開けた・・・・
その瞬間箱から、とがった爪をつけた大きな鬼の腕が飛び出し、
二人の体のガシッと掴むと、そのまま箱へと引きずり込んでいった。
後には咳き込むスズメと大きな箱だけだった。

こうして自分の凶悪なまでの愛を貫いたおばあさんと、
人の顔色をうかがい、どちらか一方の選択から逃げつづけたおじいさんは、
この世界から姿を消した。

のちの村人の話しでは、山の中に大きな屋敷など何処にもないと言

う。

（後書き）

これはこのサイトに小説を乗せ始める前に書いたものです。
他の人にも読んでもらいたいと、つい考えが浮かんでしまい乗せました。
最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。
またの機会があれば他のお話で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0100d/

舌切りスズメ　～悲劇の幕開け～

2010年10月10日10時19分発行